

蒲生慶一先生への御礼

渡辺 周
WATANABE Shu

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

Quadrante, No.24 (2022), pp.23–24.

蒲生慶一先生と初めてお話をさせて頂いたのは、2016年2月の教授会の後だったように記憶しています。私はその月の初めに本学へ赴任しましたが、本学の教員の中で初めて会話しやすい会話をしたお相手が蒲生先生でした。アヒルやガチョウが生まれて初めて見た動くものについていく、というわけではありませんが、その後も絶えず蒲生先生とは話をする機会に恵まれ、これまで私が本学で最もよく話したのは、蒲生先生だと言えます。そうした中で、教育や研究、大学の業務について様々なことを教えて頂きました。その御礼として、蒲生先生にお世話になったことを振り返ってみたいと思います。

まず蒲生先生について思い出すのは、本学に必要な授業を数多くご担当頂いていたことです。私が本学に着任する前に、これからどのくらいの授業を担当するのだろうかと思い、分野が近い先生方の担当授業数を調べていたところ、蒲生先生の担当授業数がかなり多く、自分もこのようになるのかと不安に思ったことを今でも記憶しています。後になって蒲生先生から伺ったところでは、元々担当しないといけない授業に加えて、例えば、基礎演習で担当者が足りない（本来ならば担当する教員が諸事情により担当出来ない）際に、その分を代わりにご担当されたり（今、学務情報システムで調べたところ、例えば、2015年度は2クラス、2012年度は3クラスご担当されていました）、公務員試験対策のためのミクロ経済学・マクロ経済学の授

業を、毎年持ち出しでご担当されていました。また、このような特別な授業だけでなく、蒲生先生は本来の担当授業においても、ご自身の研究に最も近い内容を扱うのではなく、教育上の必要性から、ミクロ経済学・マクロ経済学という経済学の中核的な内容を教授されていたことも印象に残っています。私自身も、本学では経営学者が1人しかいないという立場から、本来の専門の経営戦略論や経営組織論の他に、研究とは直接的には関係のないマーケティングや財務諸表の見方まで教えようとしていたため、教えるべき内容の取捨選択で蒲生先生が採用されていた考え方は、参考になると共に、励みになるものでした。

学部教育において蒲生先生にもう1つ大変お世話になったこととしては、学部1年生春学期必修授業の「基礎リテラシー」（蒲生先生の時代は、学術リテラシー）が挙げられます。この授業を2020年度から私が担当することになり、どのように授業を設計すれば良いのか、また、学内外の講演を依頼する方々とどのように連絡をとったら良いのか困っていた際に、蒲生先生は大変親身になって対応して下さいました。2019年11月頃のことですので、その頃には既に体調が優れない状況であったのかと思いますが、講演を依頼する方々には、まずは1回で良いので顔を見せて直接挨拶に行った方が良いとおっしゃり、それぞれの方の所まで案内をして下さった上で、ご紹介下さったことは、



蒲生先生のお人柄を表すエピソードとして今でも覚えています。

また記憶に残っている、という意味では、上記のように何らかの出来事があったお世話になった機会もちろんですが、それ以上に、日々の何気ない会話をさせて頂いたこと、それ自体が当てはまると言えます。研究講義棟の東側の出口を出た先のところで、週に何度もお会いし、お話させて頂く機会がありました。そうした機会においては、本学で物事がどのように動いているのかを解説して頂くと共に、私からも様々な質問をさせて頂きました。個人的な、何気ない会話ですので、ここに詳細を記すことはしませんが、教育や研究、大学の業務など様々な面について、その時々に応じ、色々ご相談させて頂いたり、アドバイスを頂いたことが大きな思い出です。悩んでいることがあって、どなたかに相談したい、ただアポイントメントをとるほど大げさな問題でもない、というような場合には、蒲生先生がいらっしゃることを期待して、ふらっと研究講義棟を出て、いつもの場所を訪れてみる、ということを時々行っていました（時には、蒲生先生の授業時間を調べ、その終わり頃を狙って、偶然を装い、お話を伺いにいったこともありました）。

蒲生先生から、身体の調子が良くないかもしれないということを最初に伺ったのは、そのような何気ない会話の中であったように記憶しています。いつもとそれほど変わらない調子でおっしゃられており、どれほど深刻なのか正確には理解出来なかったものの、週に何回もお話しさせて頂く相手であっただけに、それ以来、私の中の大きな心配事であるのが常でした。ただ他方で、それ以降しばらくの間もいつもの場所でいつものようにお話させて頂く時期が続き、私自身の願望によって、蒲生先生との機会はずっと続くものだと思っておりました。

ただ、蒲生先生の訃報は、私にとって突然訪

れました。私にとって突然であった、というのは、実は、私自身の習慣が変化し、2018年の夏頃からは研究講義棟の東側の出口を出た先へ行くことがなくなり、さらに、2020年にはコロナ禍もあり、蒲生先生とお話させて頂く機会が（上述した基礎リテラシーでお世話になった件を除けば）めっきり減ってしまっていたためです。最後にお話したのは、2020年の秋頃、エレベータの中でのごく短時間であったように思います。体調の問題で1限の基礎演習は休講にせざるを得なかったものの、その後の授業を何とか実施するために大学に来た、という趣旨のことをおっしゃられていたように思います。このように最後まで教育に関する責任を果たそうとされている姿が印象に残っているものの、ただ最後の会話がこのような短時間で終わってしまったこと、そして何より蒲生先生ともうお話が出来ない、ということが心残りでなりません。

この2年半の間、蒲生先生とほとんどお話が出来なかったこと、さらに、この先もずっと相談させて頂く機会がないということに、私の心は穴が空いた状態が続いています。蒲生先生は、大学にとっても大きな存在でしたが、私個人にとっても極めて大きな存在でした。それだけにこの度の訃報は残念でならないのですが、ただ蒲生先生の教えは、様々な面で私の中に残っており、これを引き継いで今後も、教育や研究、大学の業務に携わっていくことになります。蒲生先生のご冥福を心よりお祈りいたしますと共に、これまでのご指導に御礼厚く申し上げます。どうもありがとうございました。安らかにお眠りください。